

# 『青山歌壇』短歌受賞作品発表

青山学院創立135周年を記念して、第4回「青山歌壇」短歌をテーマ「光」または自由で募集し、幼稚園児から大学・大学院生、青山学院関係者など499名の皆様よりご応募いただきました。

## 最優秀賞

く  
フィリピンの子どもたちの目光つてる私達よりとつても強く  
(初等部六年 伊藤 綾)



テレビか写真で見たのでしょうか。「フィリピン  
の子どもたちの目光つてる」という発見がすばらしい  
です。「私達よりとつても強く」のところ、い  
つまでも心に残りました。  
(小島ゆかり)

あの人の笑顔がいちばんまぶしいよ焼けつく日射し焼きつ  
く記憶  
(高等部三年 浅賀 未央)



激しい陽射しの中で、好きな人を見つめている女  
性の作者。夏の光よりもまぶしい彼の笑顔が、青春  
の記憶に鮮明に焼きつくのですね。「焼」という文  
字の繰り返しがとても巧みです。  
(日置 俊次)

稲光黄色いフォークが闇空を切り裂くさまにデイキンスン  
思う  
(大学院文学研究科二年 百瀬 来順)



愛・宗教・自然をテーマとして新しい短詩を書い  
た米国の女性詩人デイキンスン。この一首は彼女に  
寄せる敬愛の思いがあって生まれた歌だろう。「黄  
色いフォーク」という表現が鮮やか。  
(高野 公彦)

心より感謝申し上げます。受賞された方には表彰状と副賞、応募さ  
れた方へは参加賞を差し上げます。  
第5回短歌募集の際は、ぜひ作品をお寄せください。

## 理事長賞

お台場の光彩なす夜の海に超高層の影ゆらぎいる  
(元理工学部教員 遠藤 邦彦)



お台場の華やかな光が海に映ることによって、幻想  
的な世界が生まれてくる様を歌った作品。都会的な情  
景の中にも、ロマンがあることを、年齢を感じさせない  
感性で描き出し、気づかせてくれました。  
(松澤 建)

## 院長賞



院長代行  
半田 正夫



七回のうらの攻げきツアーアウト打席に立つて光る汗ふく  
(初等部五年 中山 翔貴)

わかるなあ、この気持ち。私にもこのような思い出があります。光  
る汗が額からもバットをにぎる手のひらからも出るといふ緊張感。一  
生の思い出となることでしょう。素晴らしいです。

茜さす川原の道に映る影ふたつはやがてひとつに変わる  
(高等部一年 飯嶋あずさ)

ドキッとすること内容。昔みた映画の懐かしい1シーンを思い出します。  
作者は恋に淡い憧れを抱いているのではないのでしょうか。ほほえまし  
く、自分にもこんな時があったなあ郷愁をおぼえます。

大 学 長 賞

たくさんさんの読点をうつようにして各停でゆく約束の駅へ

(大学国際政治経済学部三年 巻瀧 郁未)



恋人との待ち合わせでしょうか。いろいろと胸が躍ります。一駅一駅止まるのがじれったくもあり、駅ごとに恋人への思いをかみしめる時間も十分あります。読点という発想にびっくりしました。(伊藤 定良)

女子短期大学長 賞

火曜日の娘うらやむ父親の好きな歌人は高野公彦

(女子短期大学芸術学科一年 仲原 世)



火曜日に高野先生の授業があるのででしょうか。短歌に親しまれているご家庭の様子やお父様その人が深く伝わってきます。これからも仲良く、創作・鑑賞を続けてください。(谷本 信也)

高等部長 賞

すぐそこに門出の時を感じれば小さな思い出更に輝く

(高等部一年 増山 尚大)



卒業はどの段階でも意義深いものですが、とりわけ高校の卒業は、子供から大人への脱皮の時として印象深いものでしょう。楽しい思い出を胸に、大人の仲間入りをする心意気も感じられる秀作。(大村 修文)

中 等 部 長 賞

昼休みいつもの景色切り取ってそっと心にしまひこんだら

(中等部三年 藤田 懂子)



平穏な日々の愛おしさに引かれつつ、そっとしまった景色には何が映っていたのでしょうか。どんな思いを胸に、何を始めるのでしょうか。複雑な心情を巧みに歌い、時空を超えて想像が広がる秀歌です。(山本 与志春)

初等部長 賞

朝の五時まどをあけると光さすきれいな光この世を照らす

(初等部五年 井原 芳春)



夏の一日、朝早く起きた時の情景がこの歌を詠んだ芳春君が見た光景と重なるような気がします。そして、新しい朝の始まりをきれいに詠んでいます。新しい命をいただいた恵みがよく表されています。(飛田 浩昭)

佳 作

帰り道いちようの下でぎんなんがかくれたつもりでもにおつてる

(初等部四年 松原 未央)

月の夜きらきら光る夏の海光の上を泳いでみたい

(初等部五年 伊藤 翔)

船の上オレンジ色の光線が僕の心を穏やかにする

(初等部五年 斎藤 大雅)

迷う時心静かに目をとじて進むべき道光がやく

(初等部五年) 田中 もも

月光る真夏の夜のあわい色松に止まったほたるの光

(初等部五年) 柳橋 真奈

太陽も寿命があるのを知りました燃え尽きる時人はどうなる

(初等部六年) 柏木 真な

夜の窓部屋から見えた満月が美しいけど切なく見えた

(中等部二年) 高山美咲子

飛沫上げ光を散らす噴水で子供の瞳また水に似て

(高等部一年) 秋山 裕佳

突然の雷鳴響く坂道に色とりどりの傘の花開く

(高等部二年) 大竹 萌絵

富士山が憎らしく見える合宿も6日目の朝は美しく輝く

(高等部二年) 西岡 美咲

一瞬の光によって奪われた人々の傷今も癒えない

(高等部二年) 初谷 美紀

差し入れの花火の束が嬉しくて疲れがきえた合宿の夜

(高等部二年) 正木 恵理

学食のしょっぱい味噌汁飲むたびに茨城の母の手料理思う

(女子短期大学国文学科一年) 吉川 華乃

身長が小さいものほど価値がある私のえんぴつ別れが近い

(女子短期大学英文学科一年) 山崎 夏希

あおくさくなくなった手で持つ鍋の中若葉色した絹さやゆれる

(女子短期大学国文学科二年) 板倉 美帆

不採用通知届きてみづみづしき輪切りレモンを砂糖に浸ける

(女子短期大学専攻科国文専攻) 田代麻里紗

青空をチェコから連れてきたような公孫樹並木はひかりの絵画

(大学院国際政治経済学研究科目録履修生) 桜井美保子

河口湖の夜空明るく見上ぐれば光の梯子富士にかかれり

(校友) 深川三三子

## 総評

### 光としての歌

日置 俊次

第四回「青山歌壇」にまた秀歌がそろいました。「光」の題詠で、さまざまな光が詠まれました。フィリピンの子供たちの生き生きとした眼の光や、あの人忘れられない笑顔のまぶしさ、雷のするどい光、夜の海に揺れるビルの灯。自由詠で入選した作品も含めて、こうした歌の一首一首、それぞれがみんな光となって、われわれ読者を照らしてくれるようです。ほんとうに短歌はいいものですね。

青山学院は今年、百三十五周年をむかえました。その伝統の上に、みなさんの歌声がさらに大きく響くことを願います。キャンパスで拾った銀杏の葉が一首の歌をプレゼントしてくれるとき、一枚の葉もキャンパスも、かけがえないものにして愛しくなります。これからも歌を詠み継いでいきましよう。今回、不運にも入選しなかったひとは、さらに言葉に磨きをかけて、次回に挑戦してください。